



菅生学園報

第13号 2023年 9月号



理事長メッセージ

継続は力なり～卒業生の活躍に期待する～



理事長
島田 幸成

私が菅生高校で英語を教えていたころのことです。今からもう、20数年前になります。今はもう、ありませんが、体育コースというコースがあって、2年生を担当していました。当時は男子生徒のみで、皆、体育系の各クラブに所属していました。各学年2クラスあって、活気がありました。

教えていたクラスに金森敬之くんという生徒がいました。野球部所属で、ピッチャーをしていました。はるばる、大阪から来ていて、地元シニアでは、あのダルビッシュ選手の一つ先輩だということでした。3年生最後の夏、エースをつとめ決勝まで行きましたが、残念ながら惜敗、甲子園には行けませんでした。その後も活躍、プロ野球日本ハムに進みました。

彼は授業の前だったが熱心に英語の筆記体を練習していました。何を練習しているのか？聞くと、「先生、俺がプロ(大リーグだったか、)に進んだときのためにいまから自分のサインを練習しているのですが、これで大丈夫でしょうか？」と聞かれた。ギラギラした真剣な眼差し、滑らかな筆記体の彼のサインは忘れられません。プロでは怪我に苦しめられながらも12年間、日本ハム、千葉ロッテで活躍。日ハム時代、クライマックスシリーズでのピッチングは記憶に残る投球でした。

その後、社会人野球などでも現役を継続、数年前に引退、コーチとして活躍していました。その金森くんが、この1月から、社会人野球パナソニックの監督に就任しました。そして、パナソニックは7月、東京ドームで開催された都市対抗野球全国大会に大阪代表として進出、素晴らしい結果でした。卒業生の活躍は、大変嬉しいことです。諦めず、厳しい世界で自分を磨けばそこには何かのチャンスがめぐってきます。今度は指導者としての活躍を期待したいです。ある意味選手よりも指導者としてのほうが責任は重いの、やりがいがあると思います。今後も彼の活躍を陰ながら見守りつつ、応援して行きたいと思います。

菅生のあゆみ

小学校の思い出 - 松前重義先生とのご縁 -



副理事長
島田 洋子

毎日、元気で明るい菅生学園初等学校の児童を見ていると、自分の小学生時代を思い出します。実は、私が通った熊本の白川小学校は、東海大学の創立者である松前重義先生が卒業された小学校なのです。もっとも、この事実は数十年前、前理事長の島田久が羽村の西友で松前重義展を開催したおりに、先生の当時の通信簿を拝見させていただいてわかりました。事実はさておき、私が白川小学校で過ごした3年間の後半2年間は、とてもユニークな教育内容でした。私のクラスの6年2組全体が町となり、この町の中に市役所、郵便局、放送局、保健所、図書館などがあり、全員が町民となって活発にグループ活動をして楽しみました、同時に、運動や勉強にも励み、良き思い出を数多く残すことができました。

菅生学園の皆様には、四季折々の美しい自然の中で、児童・生徒が先生や友達と遊んだり学んだり、数多くの経験を積み重ね、元気に、そして心豊かに成長していけるよう、これからもよろしく願いいたします。

東海大学の創立者である松前重義先生は、熊本県上益城郡大島村（現在の嘉島町）に生まれ、その後小学校5年生の時に熊本市内に転居しました。その後、県立熊本中学校（現・熊本高校）、熊本高等工業学校（現・熊本大学工学部）を経て東北帝大（現東北大学）工学部で電気工学を学びました。大学を卒業後、通信省（現総務省）に技官として採用され、国の電気通信基盤の整備に尽力しました。1936年に東京・武蔵野に望星学塾を開設、これが東海大学の母体となりました。松前先生は、デンマークの国民高等学校の教育を範としながら、対話を重視し、ものの見方・考え方を養い、身体を鍛え、人生に情熱と生き甲斐を与える教育をめざしました。



松前重義先生
(東海大学HPより)

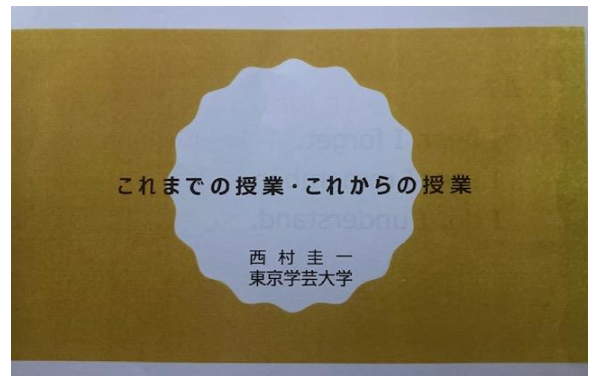


学びの城の玄関ホールには菅生学園初等学校3、4、5年生によるグリーンスクールの成果報告が掲示されています。自然豊かな嬌恋でたくさんの経験を積んでさらに大きく成長した児童の様子がうかがえます。

学園トピック (1) 営生学園教職員研修会

8月30日(水) 9:00～15:00 初・中・高の全教職員を対象とした「営生学園教職員研修会」を今年も学びの城で開きました。内容は以下の通りです。

- 1, 理事長講話「営生の将来を見据えた経営課題」
- 2, 講演「これまでの授業・これからの授業」
～初・中・高の一貫性を視野に入れて～
講師; 東京学芸大学 数学講座 数学科教育学分野
教授 西村圭一氏
- 3, 研究の実践報告
初等学校 小島拓海 教諭
中等部 知崎陽一 教諭
高校 長谷川英樹 教諭
○講評 東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構 高校探究プロジェクト
准教授 藤村祐子氏
- 4, 一貫教育取組具体化検討会議(部会)
教務部会, 生徒指導部会, 広報部会
国際交流部会, 研究部会



西村圭一先生

東京学芸大学大学院教育学研究科教授、学長補佐

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程修了。博士(教育学)。
東京都立高校、東京学芸大学附属大泉中学校、同附属国際中等教育学校、国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部総括研究官を経て、2011年、東京学芸大学教育学部准教授。16年に教授、19年から現職。
専門は数学教育学。東京学芸大学先端教育人材育成推進機構高校探究プロジェクトリーダー Bowland Japan代表(<https://bowlandjapan.org/>)、探究オリンピックー明日の思考力コンテストー委員長、東京学芸大学SSH/WWL合同推進委員、東京都立小石川中等教育学校SSH運営指導委員 日本学術会議特任連携会員(数理科学委員会数学教育分科会) 日本数学教育学会理事・数学教育編集部長、日本教科教育学会全国理事、日本教材学会理事、IJMEST (International Journal of Education in Mathematics, Science and Technology) Editorial Advisory Board

この研修会は年一回8月末に開いております。(コロナ禍のため3年前は中止、一昨年は午前中のみ、昨年は2時半まで)それぞれの教育活動の都合上、全教職員が一堂に会す機会はこの時しかとれず、貴重な時間です。

まず、理事長が日ごろの教職員の職務遂行に対して感謝と労いの言葉をかけ、学園経営の現状と今後の営生学園の一貫教育校構想を中心に話しました。

続いて今回は、初等学校と中等部で直接ご指導いただいている西村教授のお話を伺いました。授業改革に視点を当て、現代的教育課題である「探究的な学びのある授業づくり(授業をデザインする)」の重要性などをわかりやすくご講義いただきました。

研究主任からの実践報告は、初等が特別活動(縦割り班活動)について、中等が講師を招いての研修会や研究授業の様子、高校は互いに授業を公開し合って学び合う研究授業の(毎年全員が実施している)取り組み状況が主な内容でした。

授業は教師にとって最も大切な職務です。これでよしというゴールはありません。児童生徒のために常に創意工夫していくことが使命です。

(常務理事 和智紀朗)

学園トピック（2） 「学びの城の美術展 2023」

今年も菅生学園初等学校、菅生高校中部部による「学びの城の美術展」が7月28日(金)～30日(日)に開催されました。今年は会場を国営昭和記念公園内にある花みどり文化センターに移しての開催となり、多くの方が鑑賞されました。

展覧会テーマは『見つけよう 自然と美 生命の輝き』。人形作家友永詔三さんと生徒とのコラボレーションとして、友永さん制作の学びの城 Monument<森の調べ>の原寸大原型も展示されました。

6回目となる今年の美術展。初等学校の児童たちの創る喜び溢れる作品の数々、中部部の生徒たちの内面と向き合っ
て思考を深めた成長のあとが感じられる作品の数々と、今年も力作ぞろいの充実したものとなりました。

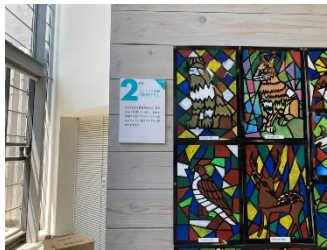
初等学校の作品から



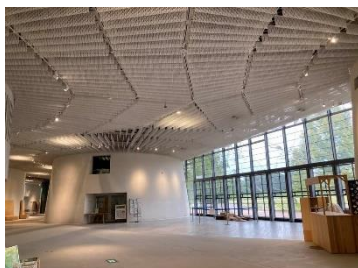
初等学校と中部部の作品が
一緒に展示されたコーナー



中部部の作品から



中部部美術クラブの作品も展示されました



今年会場となった国営昭和記念公園花みどり文化センターの建物の設計は世界的な建築家・伊東豊雄さんとアトリエ・ワンによるもので、自然と一体になったモダニズム建築として注目され、様々な建築情報サイトでも紹介されています。屋上が緑化された建物は開放感があり、昭和記念公園の豊かな緑に溶け込んでいるかのようで、「学びの城の美術展」にはぴったりの会場でした。

新校長 インタビュー

9月1日に初等学校、菅生高校中等部の校長に就任された布村先生にお話をうかがいました。意外な素顔を迫るインタビューをご紹介します。



－ご出身とこれまでのご経歴をお聞かせください。

布村校長先生：京都市出身で、京都教育大学を卒業しました。はじめは医学部を目指していましたが、ある時、京都御所で合唱の練習をする小学校低学年の子どもの輝く笑顔を見たことがきっかけになり、教員を目指すことにしました。当初は小学校の教員を目指していたのですが、卒業時に小学校教員の採用がゼロだったため、高校の教員(数学科)になりました。その後、公立高校に11年間勤めた後、奈良の東大寺学園から声をかけていただいて25年間務めました。教員生活の中では、ソフトテニス部の顧問を務めたこともありました。公立高校では開校2年目の学校に勤務したこともありました。その学校には「みんなで学校を創ろう」という熱気があり、入学してきた生徒たちを笑顔で卒業させたいという思いが満ち溢れていました。この経験は私にとって非常に大きな財産となりました。

－25年に渡る東大寺学園での経験から学んだことは何ですか。

布村校長先生：子どもを信じることです。信じてやると子供たちは伸びます。今は無理でもいずれできるようになるということを25年間の経験を通して学びました。

－これまでの教員生活で大切にしてきたことは何ですか。

布村校長先生：勉強においてでも、行事や部活動においてでも、子どもたちが喜んでる姿を見たい。そうできる学校生活にしたいと考えてきました。

－座右の銘を教えてください。

布村校長先生：「若いころにかななかった汗は年をとって涙になる。これがいつかいい思い出になる。」

－ご趣味は何ですか。

布村校長先生：過去にはゴルフをやっていたこともありましたが。最近は映画やミュージカル鑑賞を楽しんでいます。音楽ライブも行きます。これまでにコブクロや平井堅、山下達郎、ゴールデンボンバーのライブに行ったことがあります。ビルボードライブなどもにも出かけます。

－菅生学園の印象をお聞かせください。

布村校長先生：恵まれた自然環境や校地で、子どもたちが健やかに育っていると感じています。

－菅生学園の児童・生徒に望むことは何ですか。

布村校長先生：初等学校の児童には、いろんな経験を通して様々なことを身に付けてほしいと思います。中等部の生徒には、学力をしっかりと身に付けてほしいと思っています。

－抱負をお聞かせください。

布村校長先生：地域の方も含め、より多くの方たちに菅生学園やこの素晴らしい環境を知っていただきたいと思っています。

菅生のひとこま (7)

「菅生のひとこま」では菅生学園のさまざまな場所をご紹介します。第7回は学びの城メディアセンターのオブジェです。

学びの城の図書室であるメディアセンターの入り口やカウンターには司書の大久保先生手作りのオブジェが飾られています。季節や年中行事にちなんだ楽しいオブジェは、学びの城で学ぶ児童・生徒に季節の移り変わりや、それを楽しむことを教えてくれています。ある時はドングリの種類の見分け方を、またある時はおせち料理にの説明が添えられ、新たな知識や学びに結びつく工夫が施されています。

四季折々のかわいらしいオブジェの前には笑顔で見入る初等学校の児童の姿が見られます。「自然が教科書」を教育理念とする菅生学園らしい、自然とともにあり、自然を楽しみ、豊かな心を育むオブジェです。



菅生学園初等学校

校長メッセージ



布村 浩二校長

＝キャリア教育は、実は小学生から始めることが望ましい＝

文科省によると、「一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる態度を育てる」ことがキャリア教育ですが、“自立のための基盤となる態度”こそ小学校時代に培われるのだと考えています。

想像力・自己分析力・コミュニケーション能力・自己肯定感・自己有用感こそが主体的に物事に取り組む意欲を生み、その結果として学力が身につくと考えています。

しかし、これらはすべて実は慎重に周到に準備されたロードマップを基準とし、フィードバックと前進を繰り返すことで達成されるもので、俄かな付け焼刃の取り組みでは醸成されず、時間と意欲の浪費になります。

そこで菅生学園初等学校では、子どもたちの発達段階に合わせて、綿密に準備された年間行事計画とシラバスに基づき、特別活動の力を借りながら、さらに日々の新たな発見を上品にミックスして、子どもたちの笑顔に変えてまいります。

トピック

①「グリーンスクール」実施

7月17日（月）～19日（水）の日程で、3～5年生82名のグリーンスクールを実施しました。東海大学婦恋高原研修センターを舞台に、初日はパルコール婦恋のゴンドラに乗り山頂をハイキング。2日目は川遊びと飯盒炊飯。夜のキャンプファイヤーも大いに盛り上がりしました。3日目は、早朝からキャベツの収穫や鬼押し出し園の見学など、とても楽しく充実した縦割り校外学習でした。

②「NHK音楽コンクール」に出場

7月31日、合唱部25名がNHK音楽コンクール東京都予選に出場。事前には、校内合宿も行い本番に臨みました。課題曲「緑の虎」自由曲「樹形図」の2曲を熱唱。客席から大きな拍手をいただきました。

夏のひと時、それぞれに充実した時間を過ごしました



活動報告

4 / 6	始業式	6 / 20～23	6年生修学旅行（京都・奈良）
4 / 7	入学式	7 / 1	スガニア(ネイチャー)
4 / 10	保護者会週間	7 / 4	東初協一斉研修会
4 / 13	第1回避難訓練	7 / 6～	個人面談週間
4 / 17	写生会・個人面談週間	7 / 14	終業式
5 / 2	全校集会	7 / 17～19	グリーンスクール（3～5年生）
5 / 13	父母の会総会・スガニア(プログラミング)	8 / 22～25	サマースクール
5 / 27	運動会		
6 / 2	東初協一斉研修会		
6 / 10	スガニア(イングリッシュ)		
6 / 17	蛍の夕べ		

活動予定

9 / 1	始業式・避難訓練・引き渡し訓練	10 / 31	ハロウィーンディ
9 / 9	入試にチャレンジ	11 / 1	第1回入学試験
9 / 13	TGG英語体験（5・6年生 青海）	11 / 5	第2回入学試験
	校長先生にきいてみよう月間	11 / 10	6年生漢字検定
9 / 16	授業参観	11 / 15	全校遠足（御岳山）
9 / 30	菅生祭	11 / 25	マラソン大会
10 / 1	菅生祭	12 / 6～	個人面談週間
10 / 6～	6年生三者面談	12 / 15	終業式
10 / 10	TGG英語体験（3・4年生 立川）	12 / 21～23	スノースクール（婦恋）

菅生高等学校中等部

校長メッセージ

布村 浩二校長

＝各教科ではその内容を学問として昇華するべく教材研究に取り組む＝

中学校から各教科に分かれるのは、学ぶことが高度になり範囲が広がるからで、その結果当然むつかしくなります。

一方で興味関心を強く持てる専門性も現れてくるので、自己分析力を鍛え、他者とのコミュニケーション能力を育み、自己肯定感や自己有用感につなげていくことがテーマとなります。

まずは子どもたちに寄り添いながら授業の質を上げ、「勉強は大切なものだ」という当たり前で最も重要なことを徹底していくことが必要だと考えています。落ち着かない子、気力が出てこない子の多くは実は勉強がわからない不安が原因になっています。部活動や行事を通して自分を客観的にみられるようになる時期ですので、どこかのタイミングでスイッチが入りマインドが変化し、主体的に探究心をもって物事に取り組めるように育ててまいります。

トピック

夏休み期間中に1年一貫進学コースは湘南キャンパスへ、1～3年医学・難関大コースは伊勢原キャンパスへ訪問見学を行いました。湘南キャンパスでは、スタッフの方や学生が懇切丁寧に大学を紹介し、対応していただきました。大学・企業・学生が一丸となっていていろいろなことに取り組む「東海大学チャレンジプロジェクト」で活躍中のフォーミュラカー製作のチームに詳しく話を聞くことができました。伊勢原キャンパスでは、医学部と附属病院の医療施設を見学しました。緊迫した手術室のすぐ近くまで行くことができたり、導入後20年以上の歴史をもつドクターヘリも見学することができました。

大学はまだ遠い存在ですが、どんなことを学ぶところなのか、敷地の広さや施設の充実などを五感で学んだり、現役の学生から志望動機や生活の様子や将来のことなども聞くことができ、具体的なイメージができる、系列校ならではの恵まれた機会だったと思います。

素晴らしい学習環境から大いに刺激を受けました



活動報告

4 / 6	始業式	6 / 2	生徒総会
4 / 7	入学式	6 / 10	理科実験教室
4 / 11	新入生歓迎会	6 / 14	授業公開
4 / 12	スポーツテスト	6 / 15	芸術鑑賞教室
4 / 25～27	校外学習	6 / 17	学校説明会
5 / 11	自然観察教室	7 / 5～7	期末試験
5 / 20	学校説明会	7 / 16	オープンスクール
5 / 24～25	中間試験	7 / 18	全校集会

活動予定

9 / 4～8	北海道修学旅行（3年生）	10 / 25	生徒会役員選挙
9 / 26	校内主張大会	11 / 8	夢育て講座
9 / 28	学期更新式	11 / 28	生徒総会
9 / 30・10 / 1	菅生祭	11 / 29	警察講話（2・3年生）
10 / 13	開校記念式典	11 / 30・12 / 1	後学期中間試験B
10 / 14	東海大学訪問（2年生）	12 / 15	音楽祭
10 / 17・18	後学期中間試験A	12 / 16	全校集会
10 / 20	郷土学習（2年生）		

菅生高等学校

校長メッセージ



峰岸 英仁校長

－ 特進PBLコース －

2024年度に向けて特進コースの改編を進めています。それは、来年度より医学難関大コースが高校募集も行うことになり、コースの性格が特進コースと重複するためです。そこで、今までのように大学の「一般入試」を目指すのではなく、「総合型選抜」や「推薦入試」で高いレベルの大学（含む海外）を目指すように改編します。核となるのはプロジェクト学習（PBL）で、問題解決力を養いながら、活動の実績も積み上げます。

大きなPBLは2つあり、全国レベルで開催される英語スピーチ大会への出場と海外におけるビジネスの問題解決フィールドワークです。どちらも、私たち教員の役割は、教えるのではなく、挑戦する機会・対象を提示し意欲を引き出し、それを維持できるように管理することです。教育方針「自立・自学・自生」の実践と言えます。

私は経営学部出身で、専門科目として英語を学んだことはありませんが、英語のスピーチ大会には何度か出場しました。賞には1度も届きませんでしたが、他大学の学生・英文学部の学生と同じ土俵で競えたことで、チャレンジする勇気が可能性を広げると実感できました。このような経験がPBLコース発想のきっかけにもなっています。

トピック

①サマースクール：最終日（7月21日）は発表準備とクラス内発表、そしてクラス代表による発表会でした。代表の発表はオンラインで行い、教室では評価をつけながら発表を聞きました。発表は身近な問題解決の提案でした。コミュニケーションロボット・日本経済・公園利用・貧困対策・少子化対策などについて提案や本校の環境改善を提案したグループもありました。今回の経験をきっかけに、様々なことについて関心を広げ、プレゼンテーションのスキルを高めて欲しいです。

②オーストラリア英語研修（7/21～8/5）報告会：提携校の名門バーカーカレッジの生徒宅にホームステイして学校に通い様々な経験をしました。その報告会が8月25日に行われました。原稿を用いてはいましたが、すべて英語でプレゼンテーションを行い、感じたことや得たことを発表していました。全員、堂々として自信にあふれた様子で、短い期間でしたが、大きく成長した研修となったようでした。

③自然科学部：8月29日、東海大学応用化学科にて東海大菅生生向けの体験授業が行われました。1時間目化学実験の授業を体験しました。2時間目は、2つの研究室（岡村陽介先生・松前義治先生）を見学しました。大学の研究室の雰囲気を感じたほか、簡単な練習実験も体験し、参加者はとても有意義な時間を過ごすことができました。

④弓道部：8月23～25日に明治神宮至誠館第二弓道場で行なわれた東京都個人選手権大会で、男子3名（3年村岡、2年小嶋、1年須藤）、女子1名（2年古谷）が、9月9、10日に同会場で行なわれる関東高等学校弓道選手権選抜大会に出場が決まりました。都大会には本校から男子18名、女子9名が参加しました。ほとんど未経験者の1年生はデビュー戦ということもあり、緊張したため普段通りにいきませんでした。2、3年生は気持ちを固め「腹をくくって」試合に臨める選手も多く、結果の有無に関わらず、全国大会がかかる次の試合に期待が持てる内容でした。

⑤テニス部：北海道苫小牧市にて行われた令和5年度全国高等学校総合体育大会において、1回戦 3-0 東山高校(京都)、2回戦 0-2 沖縄尚学(沖縄)という結果になりました。2回戦ではシングルス・ダブルス共に逆転してタイブレークまで行きましたが惜しくも2点差での敗退でした。北海道とは思えぬ猛暑続きの中で奮闘していました。

生徒一人ひとりの力が存分に発揮された夏

サマースクール



オーストラリア英語研修報告会



自然科学部



弓道部



テニス部



活動報告

4 / 6	始業式	5 / 13	2年生保護者会	7 / 18	全校集会
4 / 7	入学式	5 / 23～26	定期試験A	7 / 19～21	サマースクール
4 / 15, 22	保護者会	6 / 15	芸術鑑賞教室	7 / 22	第1回学校説明会
5 / 8～13	1学年校外学習 (孺恋研修センター)	6 / 17	第1回授業公開		
		7 / 3～6	定期試験B		

活動予定

9 / 27	体育祭	10 / 23～26	定期試験C
9 / 30・10 / 1	菅生祭	11 / 28～12 / 2	2年生沖縄修学旅行
10 / 13	開校記念式典	12 / 18～21	定期試験D

菅生 STEAMチャレンジ (8)

今回は菅生高校中部部・菅生学園初等学校の“A”図工・美術教育です。それぞれの図工・美術教育の内容と目指すところとして、「学びの城美術展 2023」に寄せた中部美術科藤田先生、初等学校小松先生のメッセージをご紹介します。

『描く楽しさ』 中部美術科 藤田 俊哉

「絵がうまく描けると楽しいです。自分の思ったとおりに描けたらもっと楽しいです。なぜならもっと絵を描きたくなって、夢中になるからです」これは中学生の言葉です。先日、の期末試験の中で中部部の1年生に聞いてみました。『“描く楽しさ”というテーマであなたの思うことを書いてください』……全員の回答を読むなかで、私の胸を打つ言葉がたくさんありました。「描く楽しさ。ひとつは描いている途中の考えや工夫すること。二つ目は描き終わったあとの達成感です」「私はもともと絵を描くのが苦手でした。しかし、絵をたくさん描くうちに、いろいろな楽しさを知りました。それは絵でこんなことができるんだ!、ということです。絵は人に感動を与えてくれます。絵は自分の気持ちも描けると思っています。私は中学生になって、描くことが好きになりました」なんとという嬉しい言葉! 生徒たちは美術の授業をちゃんと受け止めていてくれることを感じました。

子供たちは菅生高校中部部の3年間でさまざまなことを学びます。主要教科はもとより、美術や音楽、技術家庭、体育の学びもあります。そして美術分野での3年間に渡る学習の成果が、この『学びの城の美術展』に展示されている作品群なのです。作品を仔細に見れば、生徒たちの心の動きが見えるようです。無心にカタチを捉える喜び。色彩美への開眼。細部にこだわる観察の眼と表現の工夫。制作を通してデザインや美意識といった視覚的な感覚の萌芽がみられること……。

美術の授業を通して、自ら手を動かして作品を作ることによって生徒たちはさまざまなことを習得します。それは教師に教えられた答えではない、自らの気付きの中から獲得した感覚や技術であり、美に対する感受性だといえます。「僕が描く楽しさについて思うことは、自分の思ったとおりに描けると楽しいと思います。思ったとおりに描けなくても、試行錯誤して描くのはやっぱり楽しいと思います」この言葉もまた真理を示しています。そうだ、思ったことを実現することは楽しい。そしてそこに至る試行錯誤の過程すら、苦しくともまた楽しいのです。人はそうしてゆっくり成長します。それが教育のあるべき本来の姿であろうし、若者には試行錯誤の時間こそ大切であると思います。それを安心して試みられる環境が学校であり、教室はそうした人格形成や知の育成のための繭のような空間であるべきだと考えます。

短い時間の中で書いてもらった作文。拙い字ながら、もうひとつ素敵なフレーズが目にとまりました。「絵を描くのは自由でとても想像性がある」人生には想像力が必要だ、と子供たちが言っています。この言葉の意味を大人が忘れてしまっはいけないでしょう。

『“自然が教科書”の造形教育』 初等学校図工科 小松佑将

東京都の私立小学校では最も西に位置し、周りを里山の自然に囲まれている本校は教育理念の一つに自然環境教育を掲げています。それを具現化するものとして、開校8年目にあたる2014年に“ゆたかの時間”という自然体験学習をスタートさせました。当時現場で指導にあたっていた6人の教員で意見を出し合い、6カ年の独自カリキュラムをつくり上げたのです。その後もカリキュラムは更新し続け、2019年からは東海大学教養学部自然環境過程の藤吉正明教授にも協力いただき、より専門性の高い授業も行うようになりました。その“ゆたか”ですが、私達は始める当初から他教科と連携した横断的な学習にしたいと考えていました。そして、私は自分の担当である図工においても、積極的にそうした題材を行うようになりました。これまで私が行ってきた“ゆたか”と図工が連携した題材を整理すると、次の3つに分類できます。

まずは自然物を見て描く「写生系」。今回の展示作品でいえば2年生の「たけのこ」や3年生の「ザリガニ」がそれにあたります。「たけのこ」は“ゆたか”の授業でたけのこ掘りを行い、その日のうちに図工で写生しました。「ザリガニ」は“ゆたか”で学校近くを流れる鯉川のヌシを捕まえるという取り組みを行い、実際に捕獲したザリガニを描いています。図工でワナや釣竿をつくるなど、準備段階から2つの教科が連携しています。

次の「調達系」は自然物を採取し、材料として使うというもの。4年生の「小さなツリーハウス」で使われている小枝や葉っぱ、石などは“ゆたか”の里山散歩で見つけたものです。展示作品ではありませんが、学校周辺の竹林から孟宗竹を切り出して楽器をつくったり、集めた笹で草木染をしたこともあり、これらも「調達系」といえます。

最後の「体験系」は自然の中で行うというもので、6年生の「菅生土器」で行った野焼きや屋外での作品撮影がこれになります。「菅生土器」でいえば、まず社会科見学で実際の縄文土器を見に行くところから始まり、社会、図工、ゆたかの3教科横断といえます。他にも低学年が野山で見つけた草花や小枝をその場で並べて作品をつくるなど、「体験系」には造形遊び的な様子も入ってきます。

さて、こうした題材を毎年行う中で、私自身確信していることが2つあります。1つは子ども達は本能的といえるくらい、自然や自然物が好きだということです。自然物とは、石や木や土といった本物の素材。特に中学年以降はその素材の扱いにくさも含めて、時間をかけてなんとかしてみようというところにつながっていく気がします。もう1つは子ども達が絵を描く対象として、自分が時間をかけて育てたものや実際に触れたものほど最適なものはないということです。私は図工において“見て描く”ことが大事だと考えていますが、子ども達は技術で描くのではなく、心で描いている。同じ花を描くのであっても、ある日唐突に差し出された花と毎日水やりをして花開くのを待ちわびていたものとは、見え方が全く違うのです。“ゆたか”という授業で友達と一緒に野菜を育てたり、生き物を捕まえたりし、それによって対象に関心や愛着が生まれることがなにより大事です。愛着があるからこそ子ども達は意欲的に観察し、その集中の深さやこだわりが絵に表れるのです。

前置きが長くなりましたが、この度6回目となる「学びの城の美術展」は、これまで会場だった立川高島屋が閉館したことで、会場を新たに探すところから始まりました。なかなかよい場所が見つからずいた中で、ある日ふと、以前に家族で訪れた昭和記念公園のギャラリーを思い出しました。地面の起伏と連続したかのような建築はところどころ緑化が施され、内部には外光をふんだんに取り入れた開放的な空間が広がる。そして、多くの人が集まる公共の広場という点も理想的でした。早速中部部の藤田先生に提案し、2人でギャラリーがある「花みどり文化センター」を訪れたのが昨年の暮れでした。そこでセンターのテーマが“緑の文化の創造と発信”と知り、まさに本学園の作品展を行うのにふさわしいと思ったのです。

菅生学園の創立者である島田久は“自然の美・造形の美・精神の美が調和した教育をめざす”という哲学をもっていました。それは建学の精神である“自然が教科書だ”という言葉にも表れています。期せずして、この自然と人工物が調和したロケーションがそうした言葉と一致するように思われました。それと同時に、この会場に“ゆたか”と図工の横断で取り組んだ作品達が並ぶイメージが膨らみ始めました。

里山の自然が残る菅生の地、緑豊かな丘陵地にそびえる“学びの城”。声高に自然環境教育を謳わなくとも、毎日を通ずる校舎周辺の環境が、子ども達の心にもたらすものは決して少なくはないと思うのです。その“学びの城”で日々行われている造形教育と子ども達の試行錯誤や工夫、発見の驚きや達成の喜び。ぜひここに展示された作品から、そうした子ども達一人ひとりの姿を感じていただければと思います。